

平成29年から新之助の一般栽培が始まりました！

今年度から一般栽培となった晩生品種「新之助」は、次年度作付面積が大きく増加する見込みです。今年度の反省をふまえ、出荷される全量が食味・品質基準を確保できるようにしましょう。

1. 平成29年産新之助の生育経過と作況概況

新発田農業普及指導センター管内の平均播種日は4月18日、移植日の平均は5月14日でした。本来、新之助は茎数を確保しやすい晩生品種ですが、6月の低温の影響により、茎数確保が遅れ、茎質の低下を招きました。また、8月中旬以降の低温・日照不足により、出穂がばらつき、登熟も緩慢となり成熟期の判断が難しくなりました。

品質面では青未熟粒が多く、粒厚が薄いなどの整粒不足により、一部食味・品質基準を満たすことができない米もありました。

【新之助生育データ】

	出穂期	成熟期	稈長 (cm)	穂数 (本/m ²)	一穂粒 数(粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)	収量 (kg/10a)
H29年	8月14日	10月2日	74	354	67	88.6	25.3	526
H28年	8月10日	9月19日	71	333	71	94.6	25.0	559

※収量は収量構成要素より算出
(データ・・・新発田農業普及指導センター調査ほ)

2. 本年の問題点

- ①5月20日頃の遅い田植えのほ場では、茎数確保や出穂期が遅れ、登熟不良となりました。
- ②茎質の低下や、8月中旬以降の低温、日照不足により出穂・登熟がばらついたほ場では、成熟期の判断が難しくなるとともに未熟粒の割合が多くなりました。
- ③山沿い地域など一部のほ場では、穂もちや紋枯病などの病害発生がやや多く見られました。

3. 課題と今後の対策

①移植時期の改善

初期生育の安定確保のため適期田植えと保温的水管理に努めましょう。

②中干し、溝切りの適期実施による

生育調節の徹底

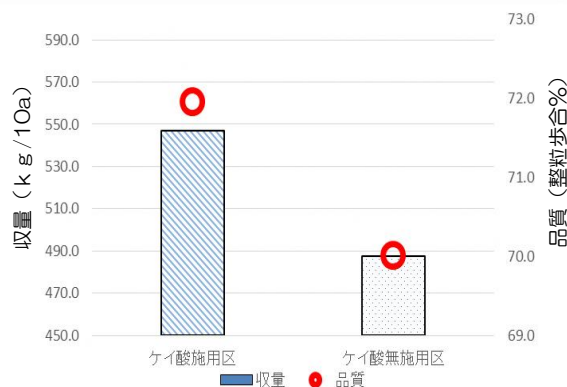
分けつ後期に茎数過剰となりやすいことから適期の調節を行いましょ。

③土づくりの徹底

生育期間が長いことから、栄養凋落を防ぎ、根の健全化に努めるために、ケイ酸質資材等による土づくりを積極的に行いましょう。(右図)

④病害対策

いもち病に弱いため、予防防除を徹底しましょう。茎数が多くなりやすいことから、紋枯病の発生にも注意し、防除に努めましょう。



図：H29 自然災害軽減対策実証ほ
(阿賀野市安田地区) 品種:コシヒカリ
・ケイ酸資材・施用量
資材名:とれ太郎(ケイ酸分30%)
基肥:80kg/10a、追肥:20kg/10a

今年度は出穂期と収穫期直前に2回の強風(台風5号、18号)がありましたが、無施用区に比べケイ酸質資材施用区が品質・収量とも上回りました。